

第4章 史跡河越館跡の本質的価値と構成要素

史跡河越館跡が有する価値については「本質的価値」と「本質的価値に準じる価値」、そして「社会的価値」の3つに分けて整理を行う。

本質的価値とは、史跡指定に値する最も重要な価値のことを指す。この点については、河越館跡の史跡指定時に説明されたが（第3章第3節参照）、指定後の調査と研究の進展によって新たに付加された価値も含まれる。史跡河越館跡の本質的価値は、史跡の保存と活用を計画するための前提であり、本計画の根幹となる概念と言える。本質的価値に準じる価値とは、本質的価値そのものではないが、本質的価値と重層的に連結することで、河越館跡が持つ歴史性を顕在化することのできるものである。社会的価値とは、現代の社会活動を行う上での価値を指すものとする。

第1節 史跡河越館跡の本質的価値を構成する要素

河越館跡は、中世武家政権を支えた在地領主の実態を究明する上においてきわめて重要な遺跡であり、河越館跡の特徴は、発掘調査報告書である『河越館跡史跡整備（第1期整備）に伴う発掘調査』『河越館跡史跡整備（第2期整備）に伴う発掘調査』によって以下の4点が示されている。

- ①秩父平氏の一派が入間川流域に進出し、館を築いた「河越」を名字の地とした。
- ②入間川を東に臨む台地上に立地する、平安時代末期に始まる武蔵武士・河越氏の館跡であり、屋敷や墓域など様々な性格の区画や道路が集まった、在地領主による都市計画が把握できる遺跡である。
- ③政治的な酒宴や儀式で使用される手づくねかわらけの他、儀礼の場を飾る調度品としても珍重された青白磁の梅瓶など、館の格式を示すステータスシンボルとなる器が河越館跡から出土し、河越荘における政治・経済の中心だったことを確認できる。
- ④河越館は平安時代末期から南北朝時代にかけて存続したが、河越氏がなくなった後も跡地が繰り返し利用され地域の中心として機能したことを示す、寺院や生産にかかわる遺構・遺物、戦の陣所にかかわる遺構などを確認できる。

以上のことから、武蔵国中央部、入間川水系における政治・経済の中心地として約350年間にわたって繁栄した河越館跡の戦略的重要性とその変遷過程が把握できる。

これらの4点の特徴を踏まえ、河越館跡の本質的価値を次のとおりまとめる。

(1)「かわごえ」ゆかりの地

「かわごえ」という地名が文献に登場するのは、平安時代末期の12世紀後半に秩父平氏一派が入間川流域に進出するに際し、土地の名から「河越」を名乗り（名字の地）、「河越荘」を成立させた時まで遡る。後に河越氏が伊勢に敗走した影響によるものか、残念ながら現代では「河越」という地名こそ残されていないものの、河越館跡の東隣には「古屋敷」という河越氏の屋敷を想起させる小字名が残されており、古屋敷遺跡（第4-1図）が所在する。古屋敷遺跡からは武士の館等の政治的な場で行われる儀礼的な酒宴において消費される酒器であるかわらけが大量に出土しており、その中には河越館跡周辺出土資料では最も古い12世紀後半の手づくねかわらけ（写真4-1）が含まれている。このことから、河越荘成立段階である12世紀後半、永暦元年（1160）頃の館が古屋敷遺跡と河越館跡を中心とした場所に存在したと考えられる。

また、河越氏が京都の^{いまひえしや}新日吉社へ河越荘を寄進したことを契機として河越荘に勧請された新日吉社（現在の^{いまひえしや}上戸日枝神社。第4-1図左）が、河越館跡の近隣に所在することからも、中世において「河越」と呼ばれた地域、河越荘の中心が河越館跡にあった可能性が高い。

その後の「かわごえ」の名称については、中世までは「河越」表記で多くの文献に登場していたものが、近世になると「川越」の表記がほとんどとなり、現在に至るまでこの「川越」の表記が使用されている。このように、「かわごえ」という音で示される地域は平安時代末期から現在まで残り、川越市という市名にまでつながっていることから、河越館跡は河越荘の中心地ただでなく、「かわごえ」地名ゆかりの地でもあると評価できる。

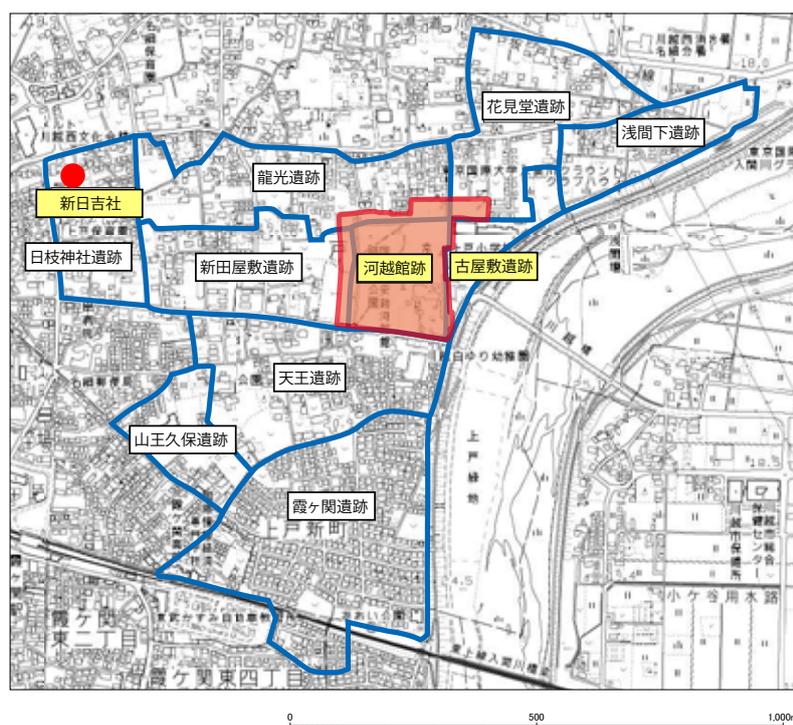
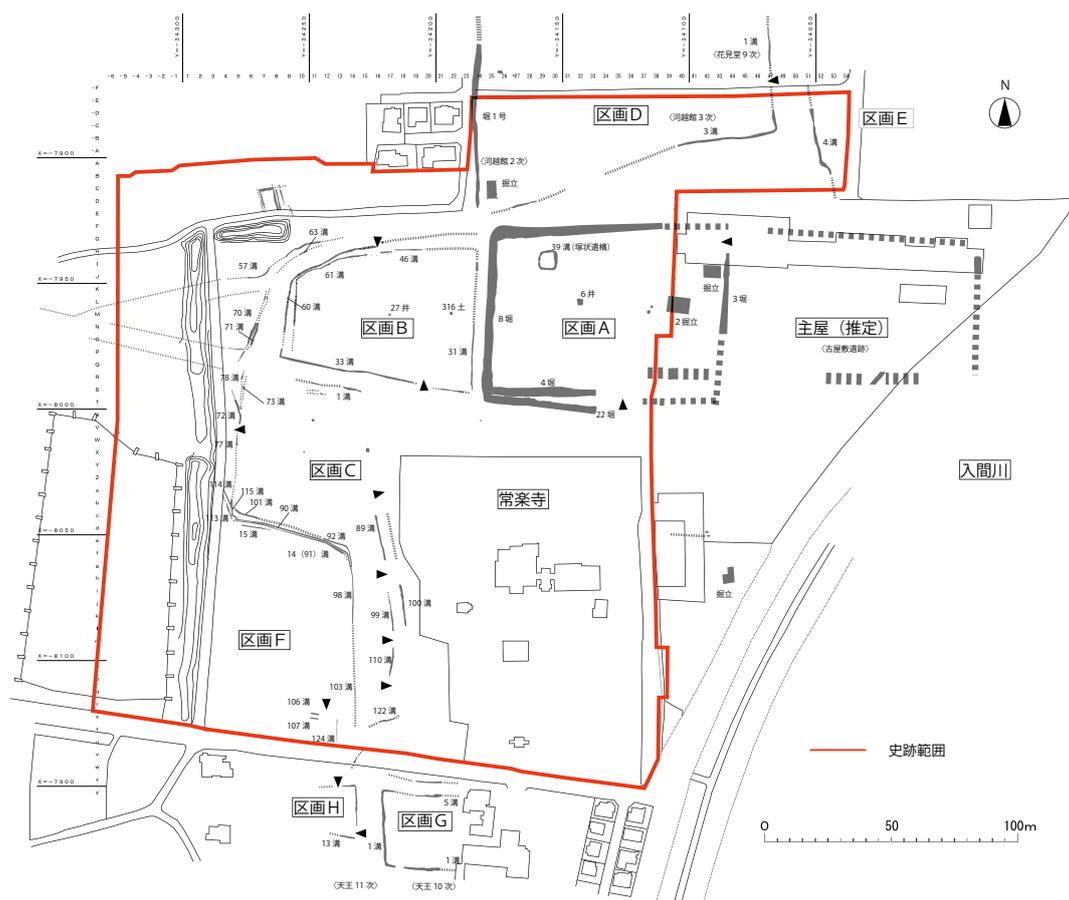


写真 4-1 12 世紀後半の
手づくねかわらけ

第 4-1 図 河越館跡と古屋敷遺跡・新日吉社

(2) 中世前期における在地領主の館跡

往時の河越館は、屋敷や寺域といった機能の異なる複数の区画が、道路に沿って並ぶというものであり、各区画は堀や塀、生垣等で囲まれていた（第4-2図）。また、館の中心部では参加者の身分を確認し、結束を固める儀礼的な酒宴が行われていたことを示す手づくねかわらけ（写真4-2）が集中的に出土している。中世前期における在地領主の本拠地の在り方の一端を示す遺跡だと言える。



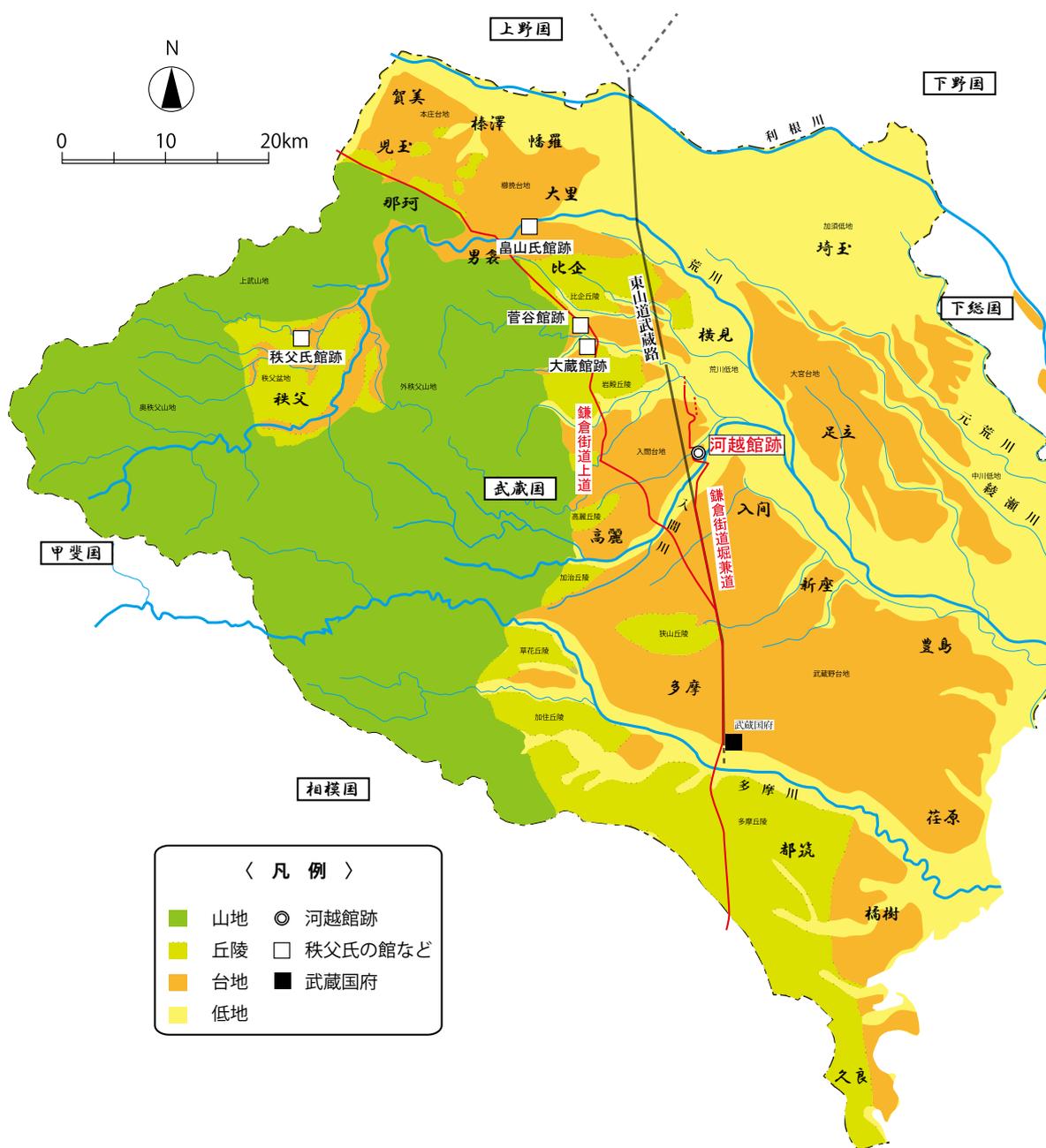
第4-2図 鎌倉時代の河越館跡



写真4-2 手づくねかわらけ（古屋敷遺跡ほか）

(3) 水陸交通の要衝

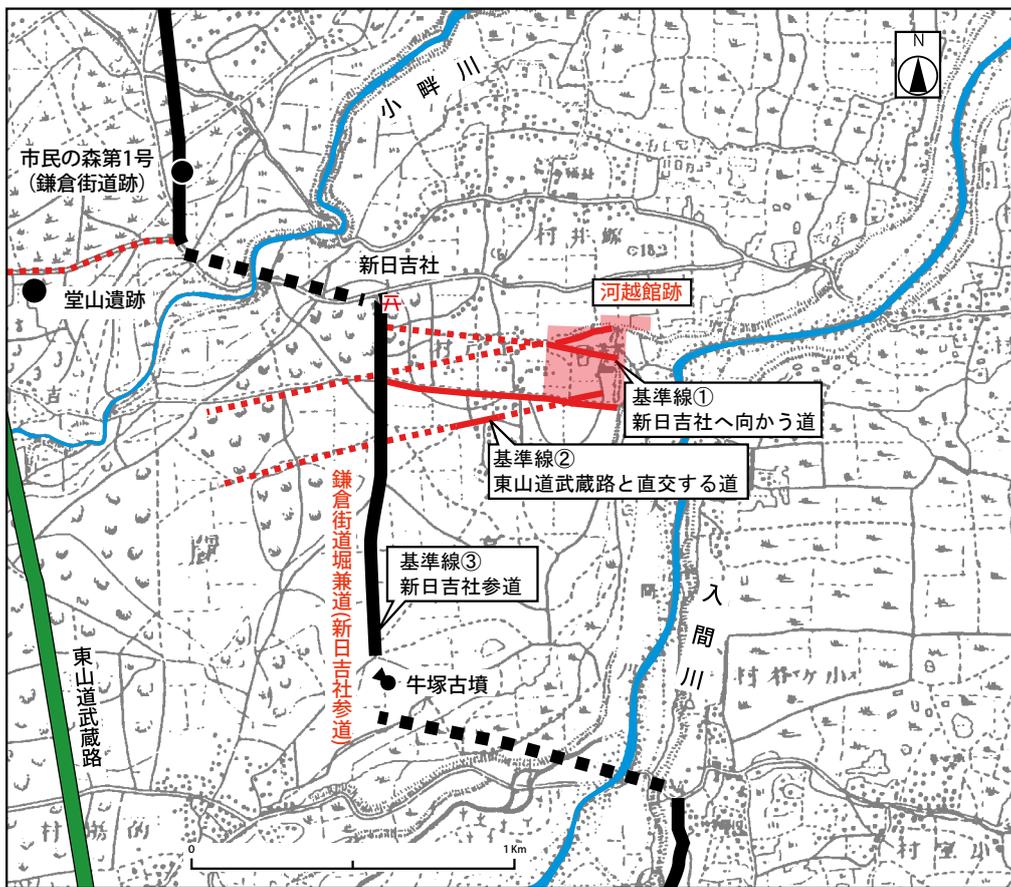
秩父平氏は11世紀より武蔵国内の水系に沿って移住していった。河越氏も大蔵（現在の埼玉県比企郡嵐山町）から武蔵国中央部に位置する河越の入間川を至近に臨む地域に進出し、館を構えた。入間川は古代以来、入間地域の物流の要であった。また館の西約1.5kmには古代以来様々な往来に利用された東山道武蔵路（後に路線の多くが鎌倉街道堀兼道へと再編・利用される）が南北に通過している。河越氏は武蔵国の中央部であり、かつ水上交通（＝物流）と陸上交通（＝情報や人の流れ）の結節点という要衝を掌握することを意識して館を構えたと評価できる。（第4-3図）



第4-3図 河越館跡と水陸交通の位置

(4) 館跡の変遷と都市的な空間の継承

河越館を構成する屋敷や寺域等の区画群の外周に検出された周辺道路は、館と鎮守の新日吉社を結び、鎌倉街道堀兼道と接続する（基準線①）。館から南西に続く道は東山道武蔵路の軸と直交する（基準線②）。そして新日吉社から付近のランドマークの一つである牛塚古墳を結ぶ線上は新日吉社の参道であり、参道と鎌倉街道堀兼道が重なっている（基準線③）。これらの道は、河越館周辺の都市的な空間を形成する際の基準線となっている。これら河越氏による「都市的な空間」は、河越氏が去った後も都市的な場の時代、上戸陣の時代、大道寺氏の時代という館跡の変遷の中で基本的な地割・道路が継承されており、一部は現代においても道路としての利用が続けられているなど、往時の景観を感じることができる（第4-4図）。



第4-4図 都市的な空間の基準線と継承される地割（下図は明治14年迅速測図）



写真4-3 都市的な場の時代に
使われた門の基礎



写真4-4 現存する上戸陣の土塁

第2節 本質的価値を構成する要素以外の諸要素

1. 本質的価値に準じる価値を構成する要素

本質的価値に準じる価値とは、本質的価値そのものではないが、本質的価値と重層的に重なることで、河越館跡が持つ歴史性を顕在化することのできるものである。

(1) 古代入間郡家

古代における河越館跡周辺には入間郡家に関わる遺構・遺物が集中し（写真4-5・6）、付近には駅路である東山道武蔵路が整備される等、既に飛鳥時代から地域開発が進められていた。平安時代末期には既に形骸化しているものの、かつて入間郡家を中心に整備された武蔵国中央部の政治拠点・経済拠点としての立地を評価した結果、河越の地に一族の新たな拠点を築くべく進出した可能性を示唆している。

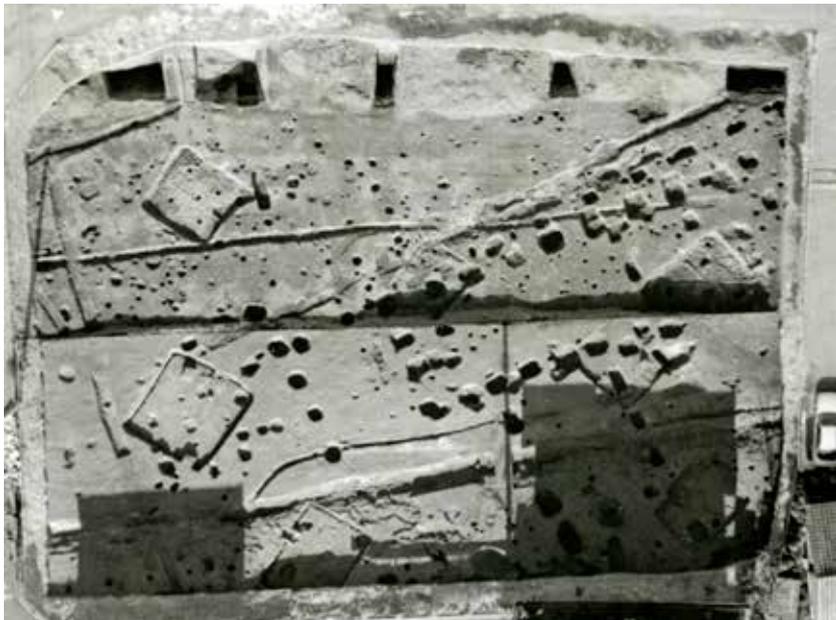


写真 4-5 入間郡家の一部と思われる掘立柱建物（霞ヶ関遺跡7～9次）



写真 4-6 霞ヶ関遺跡出土「入厨」墨書土器（入間郡家の厨家を示したもののか）

(2) 河越荘中心部の景観

河越館跡周辺には中世の遺跡群が広がるだけでなく、後白河上皇とのつながりを通じて河越氏が勧請した新日吉社（写真 4-7）、鎌倉街道堀兼道（写真 4-8）等の文化財や歴史遺産が分布し、河越氏が中央権力とつながることで権力を強めたことを示し、河越館跡が持つ歴史性を顕在化し、かつ景観形成と密接に関わる重要な要素である。



写真 4-7 新日吉社（現上戸日枝神社）



写真 4-8 鎌倉街道堀兼道（川越市市民の森第1号）

(3) 喫茶文化

『異制庭訓往来』(写真 4-9)に見える武蔵河越茶の伝承は、史跡で出土する多くの喫茶関連資料(写真 4-10)、そして河越荘内に存在した、河越氏が開山に関わったと伝わる禅宗寺院である東栄(永)寺、市内に現存し「河越茶発祥の地」とされる中院等とともに、中世の武蔵における喫茶文化の拠点としての価値を顕在化させる。

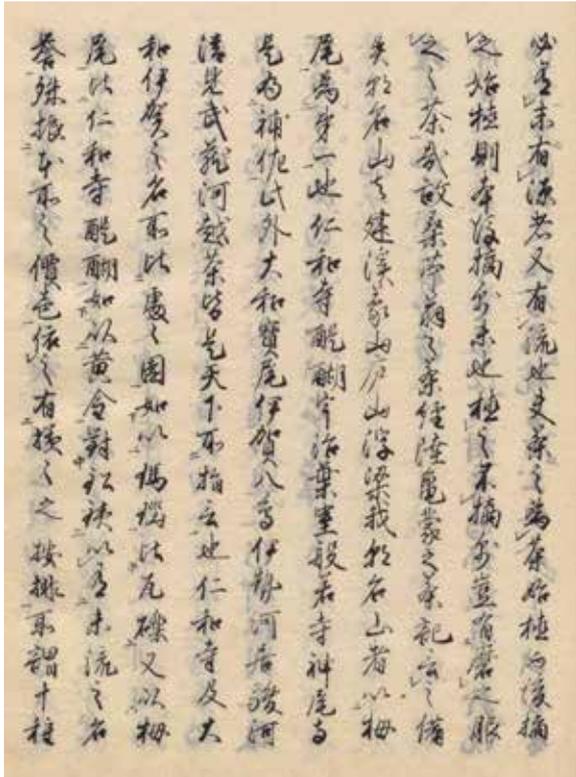


写真 4-9 『異制庭訓往来』
(出典：国立公文書館 デジタルアーカイブ)



写真 4-10 河越館跡出土の茶道具
(上段：天目茶碗 下段：瓦質風炉)

(4) 入間川と災害

『発心集』(写真 4-11)に見える入間川洪水記事等の文献史料は、治水面上における河越氏と河川の関わりなど、河越館跡が持つ歴史性と地域性を顕在化させる要素であり、入間川流域の防災啓発と関連して活用が期待できる。

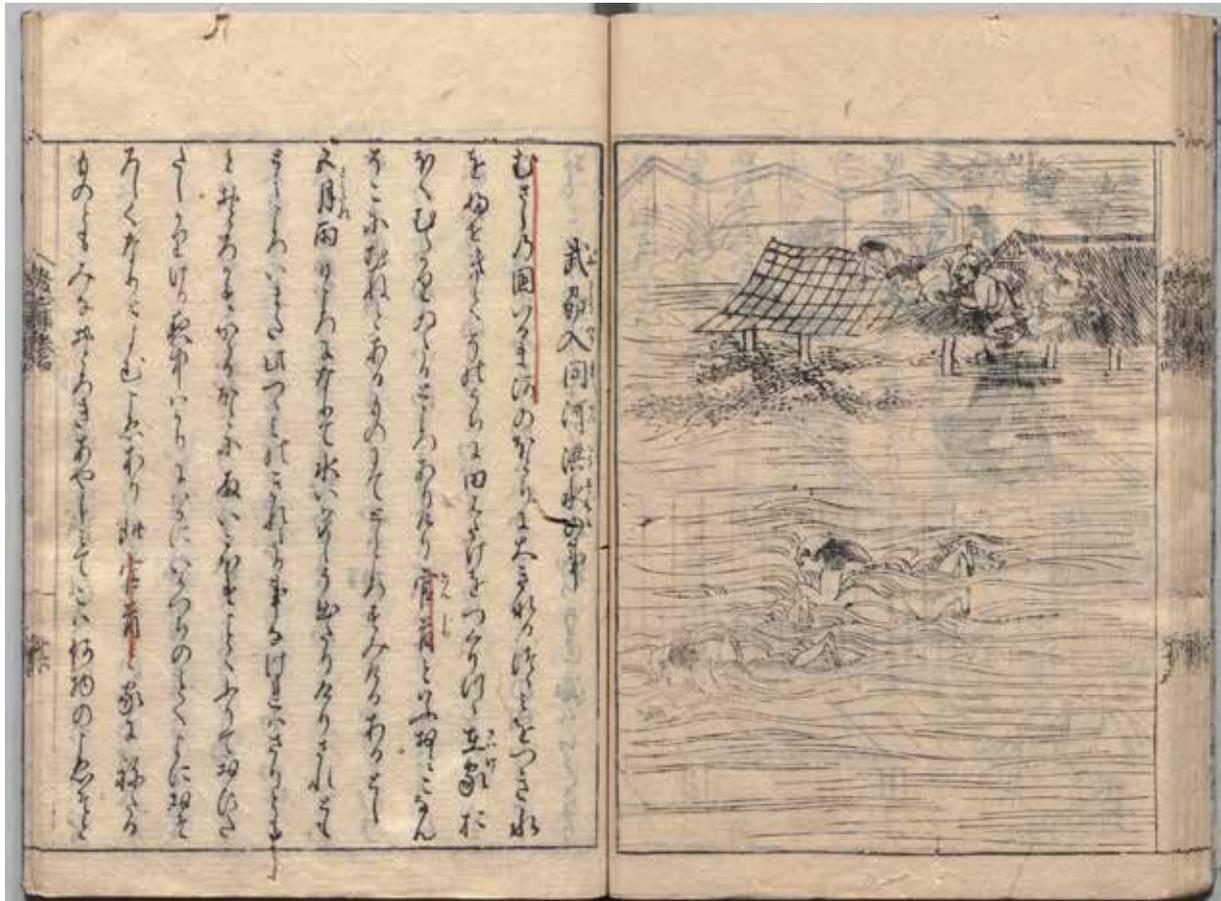
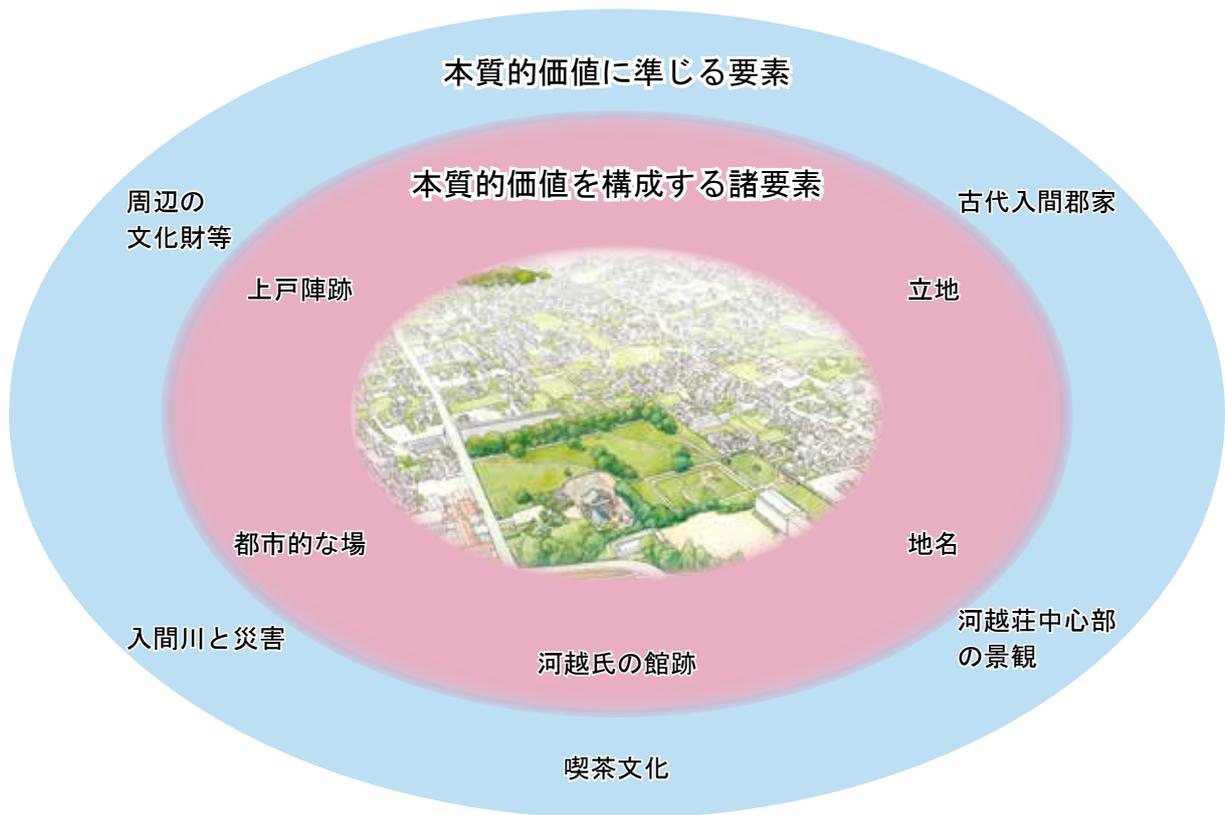


写真 4-11 『発心集』武州入間川洪水の事
(出典：国立公文書館デジタルアーカイブ)



第 4-5 図 本質的価値と本質的価値に準じる価値の概念図

II. 社会的価値を構成する要素

(1) 学校教育・生涯学習の拠点としての価値

第 1 期整備事業によって史跡公園が開園し、そこに設置されたサインや復元遺構を通じて郷土の歴史を学ぶことができ、生涯学習の場として老若男女に利用されている。また、河越館跡に隣接する上戸小学校の子ども達が河越館跡について学習する場を提供している。

(2) 歴史・自然を生かしたシンボル空間となる都市公園としての価値

「川越市緑の基本計画（平成 28 年 3 月改定版）」において、「みんなではぐくむ水と緑と歴史のまち・川越」を基本姿勢として設定されている。そして、そのための個別計画として、「歴史・自然を生かしたシンボル空間となる都市公園等の整備」が示されている。河越館跡史跡公園は、史跡という歴史を活用したシンボル空間としての都市公園であり、歴史・文化が調和しているという点において価値がある。また、河越館跡史跡公園は幅広い年齢層の地域住民の憩いの場としても機能し、地域住民に親しまれている。

第 2 期整備事業においても史跡公園としての理念を継承し、都市公園としての価値をさらに高める方向で整備内容を検討する。

(3) まちづくりの拠点としての価値

河越館跡は蔵造りの町並みから車で15分、東武東上線霞ヶ関駅から徒歩12分ほどの位置にあり、利便性は決して悪くない史跡と言える。さらに、河越館跡は川越市に花開いた武士社会の始まりの地であり、かつ室町時代後半には扇谷上杉氏の拠点である河越城(川越城)を攻めるための陣所が設置されたというストーリー性の高さから、川越城跡との一体的な活用が見込まれる。そのため、今後整備事業を進めることで、観光資源としての活用が期待できる。

第3節 構成要素の特定

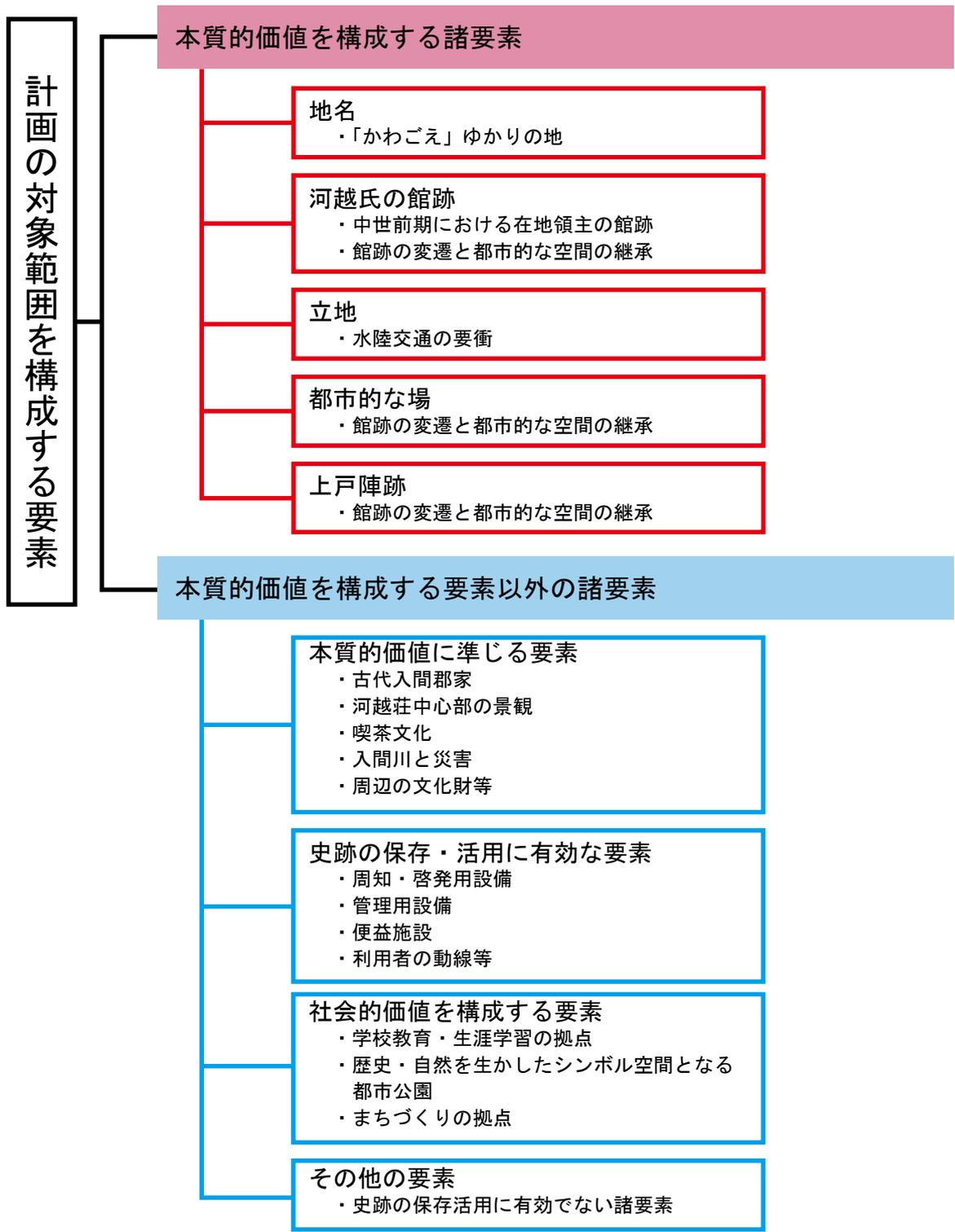
史跡河越館跡の構成要素を特定し、それらと本質的価値の関係について以下のとおり分類して整理する。各構成要素の位置については第4-7図で示した。

I. 本質的価値を構成する要素

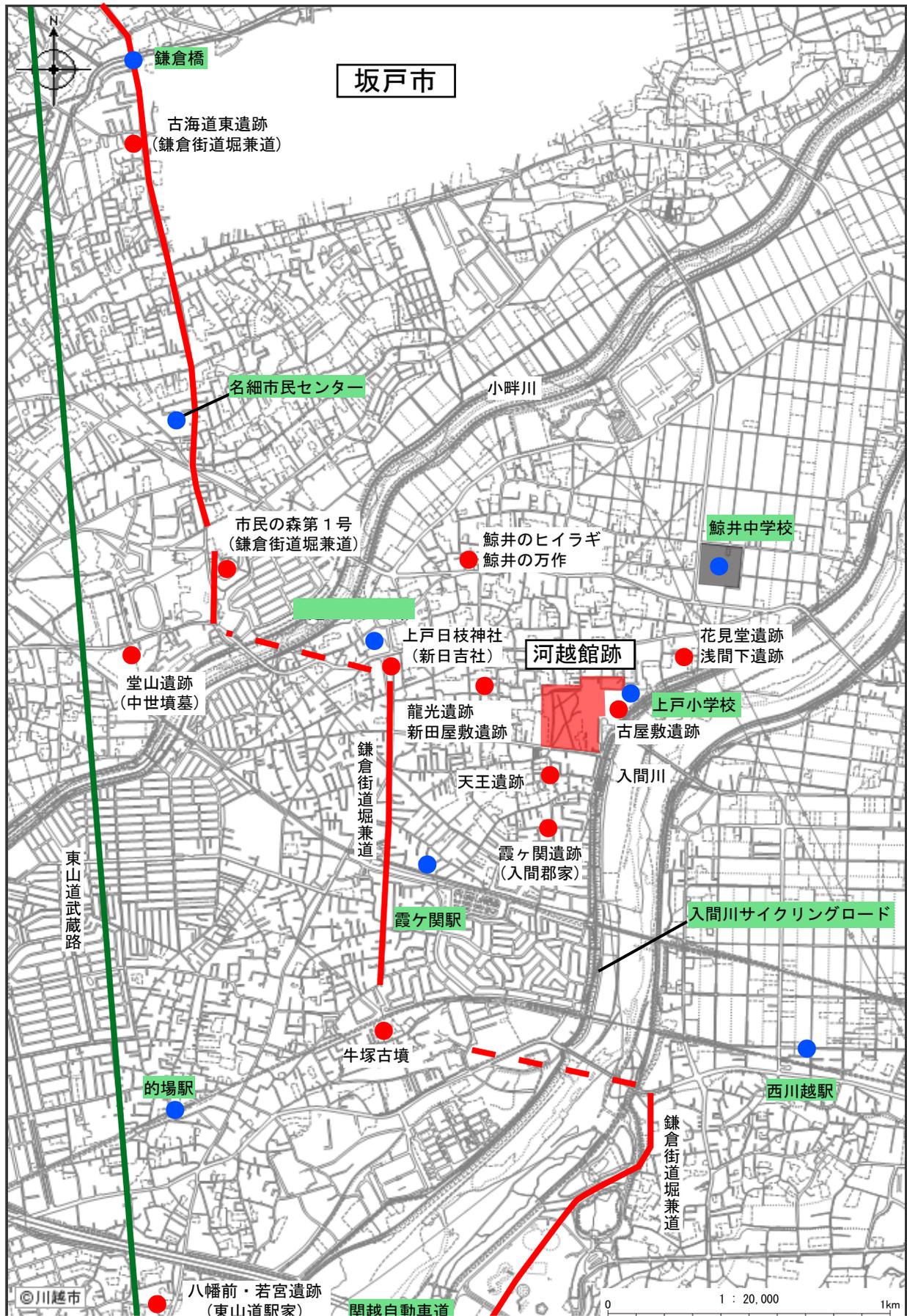
河越館跡の史跡指定地及び、今後保護を要する地域における構成要素について、本質的価値を有する要素を整理した(第4-1表)。

II. 本質的価値を構成する要素以外の諸要素

史跡指定地及び今後保護を要する地域だけでなく、史跡範囲外の周辺地域を含めた中で、本質的価値を取り巻く環境を形成する要素について整理した(第4-2表)。



第 4-6 図 構成要素概念図



第 4-7 図 構成要素の位置

第 4-1 表 本質的価値を構成する要素

分類項目		内容	構成要素	史跡指 定地内	史跡指 定地外
本質的価値を構成する諸要素	立地	○水陸交通の要衝	○立地 ・入間川を臨む入間台地東端 ・鎌倉街道掘兼道を西に臨む	○	
	地名	○「かわごえ」ゆかりの地	○地名と名字 ・平安時代から「河越」と呼ばれていた ・地名を名字に	○	○
	河越氏の館跡	○中世前期における在 地領主の館跡 ○館跡の変遷と都市的な 空間の継承	遺構 ○屋敷を構成する遺構 ・堀 ・掘立柱建物、大型井戸、塚状遺構 ○墓域あるいは寺域 ・塀、生垣 ○道路 ・区画外周道路	○	○
			遺物 ○土器・陶磁器類 ・京都系の手づくねかわらけ ・青白磁梅瓶 他 ・蔵骨器、火災にあった軒丸瓦 ○金属製品 ・太刀の兜金 ○木製品 ・数珠、人形（ヒトガタ）	○	○
	都市的な場	○館跡の変遷と都市的な 空間の継承	遺構 ○墓域あるいは寺域 ・堀、溝 ・竪穴建物、門（地形）、池 ○生産関連遺構 ・炉跡、土器焼成遺構	○	○
			遺物 ○土器・陶磁器類 ・かわらけ ・喫茶関連遺物、仏具 ○金属製品 ・銅製花瓶、鉄滓、銅滓 ○石製品 ・板碑、宝篋印塔 ・滑石製スタンプ、温石	○	○
上戸陣跡	○館跡の変遷と都市的な 空間の継承	遺構 ○陣所の郭 ・土塁、堀 ・掘立柱建物、井戸、石敷き遺構	○		
		遺物 ○土器・陶磁器類 ・かわらけ、金箔かわらけ ・喫茶関連遺物（茶臼・風炉等） ○石製品 ・石敷きに転用した板碑	○		

第 4-2 表 本質的価値を構成する要素以外の諸要素

分類項目	内容	構成要素	史跡指 定地内	史跡指 定地外	
本質的価値を構成する要素以外の諸要素	本質的価値に準じる要素	○実務官衙域 ・掘立柱建物、大型井戸、正倉、溝、柵 ○官衙関連遺物 ・遠隔地の土器（畿内産土師器 他） ・円面硯、帯金具、漆容器、漆パレット ・遠隔地の土器（東海・上野・常陸 他） ○古代交通 ・東山道武蔵路、『駅長』墨書土器	○	○	
		○河越荘中心部の景観 ○入間川 ○鎌倉街道堀兼道（市民の森第1号） ○中世墳墓（堂山遺跡） ○上戸日枝神社（旧・新日吉社） ○入間台地の中世遺跡群 （古屋敷遺跡・新田屋敷遺跡・天王遺跡 他）		○ ○ ○ ○ ○ ○	
		○喫茶文化 ○河越茶と狭山茶 ○河越館跡出土の喫茶関連資料 ○河越荘内の寺院（中院、東栄(永)寺 他）	○ ○ ○	○ ○ ○	
		○入間川と災害 ○入間川の堤防 ○氾濫土で埋没した周辺遺跡群		○ ○	
		○周辺の文化財等 ○上戸日枝神社本殿、懸仏 ○養寿院銅鐘 ○牛塚古墳 ○鯨井の万作 ○その他民俗芸能 等		○ ○ ○ ○ ○	
	史跡の保存・活用に有効な要素	○周知・啓発用設備 ○管理用設備 ○便益施設 ○利用者の導線等	○説明用サイン ○トイレ・東屋・駐車場 ○フェンス・侵入防止柵・境界標 ○通学路 ○入間川サイクリングロード	○ ○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○
	社会的価値を構成する要素	○学校教育・生涯学習の拠点 ○歴史・自然を生かした都市公園 ○まちづくりの拠点	○上戸小学校、鯨井中学校 ○史跡公園 ○霞ヶ関駅、西文化会館、名細公民館	○	○ ○
	その他の要素	○史跡の保存活用に有効でない諸要素	○史跡周辺の住宅地・耕作地 ○史跡内の市道、排水管、電柱等 ○建物基礎 ○常楽寺墓地のブロック塀（景観） ○樹木（枯木等）	○ ○ ○ ○	○